

- 2) 朝倉正, 1955: 梅雨の入りとモンスーンの入り, 天気第2巻 第7号 18頁.
- 3) 須田建, 朝倉正, 1955: A Study on the Unusual Baiu Season in 1954 by Means of Northern Hemisphere Upper Air Mean Charts, 気象集誌, vol. 33. 233-244.
- 4) Maung, Tun Yin, 1949: A Synoptic-aerological Study of the Onset of the Summer Monsoon over India and Burma, Jour. Met. vol. 6, 393-400.
- 5) Memorandum on the Rain fall of June and July and the Probable Amount during August and September 1954, Meteorological Department, India.
- 6) Ramdas, L. A. 1954: Prediction of the Date of establishment of Southwest Monsoon along the West Coast of India, Indian. Jour. Met. & Geo. vol. 5, 4, 305-314.
- 7) Staff Members of the section of Synoptic and Dynamic Meteorology. Academia Sinica, Peking, 1958: On the General Circulation over Eastern Asia (I), Tell. vol. 9. 432-446.

## 【雲 鏡】

### 天動説信者

過日、某劇場でプレヒト作の「ガリレオの生涯」という芝居をみた。役者はおのおの熱心に演戲しているらしくみえたが、表徴と虚構の混同が目立ち、正直のところ大へん退屈した。面白かったのは芝居ではなく、観客としての科学者の感想であった。つまりほとんどの科学者は自分の教祖としてガリレオを考え、芝居は幼稚でも、先人の業績をたたえる意味で敬意を表したのであった。だが天動説を主張するものは何もローマ法王と限ったわけではないので、現在の日本の大部分の大学教授、研究者は観念的には天動説を信ずるものではないだろうか。つまり世界はすべて己の学問の体系のまわりを廻転しているという固い信念、原因はどちら側にあるかはしらぬが、師に対する弟子の忌憚のない批判の欠除等、数え上げれば天動説信者の象徴ばかりではないか。

すべてを知りつくした神の科学でない以上、権威などというものは絶対的であるはずがなく、学問に進歩があるならば、そこには権威の確立と同時に権威の破壊があって然るべきだ。この矛盾が絶対的であることは毛沢東によって明確にのべられたが、ガリレオの直面した苦悩はこのような絶対的なものであった。

こう考えてみると、現代の権威者といわれる人々は科学者であつてもガリレオの側にあるのではなく、ローマ法王がその教祖になつている。場合の多いことは明瞭であろう。

(A. B. C.)

### 技術の再評価

今までの技術論は工業技術を中心としたものであったため、技術の評価が見当ちがいいになっていた点があるように思う。すなわち気象学や医学や農学のように科学的に未知のものをふまえた上での実践としての技術である天気予報や医療についての評価は大切な点がわすれられているように思われるのである。

武谷一星野は技術とは生産的实践における客観的法則性の意識的適用であると定義したが、この定義から出てくる現場の技術者に対してのアドヴァイスは科学的成果をできるだけとり入れ、客観的に誰にでもできるようにせよということであろう。しかし人間の科学が神様の科学でない以上、対象をきわめつくすことはできないから、したがって技術の発展のためのアドヴァイスだけでは、対象についての知識が十分でない場合の現場の実践には役に立たないのである。

現場で、客観的機械の代用としての技術を行うのでなく、人間の技術を実践するために何よりも現在必要なことは現場の人が考えるためのユトリをもてるようにすることである。研究者が立派な研究をするためには、ある程度のヒマが必要であると思うのだが、同じことは現場についても言えることである。それが十分みとめられていないような現在の体制はやはり技術に対する誤った評価から生れてきていることはまちがいないまい。現場の技術者はもっと「ヒマの論理」を主張すべきではないだろうか。

(N)